

広島の魅力



〈筆者紹介〉

昭和19年 長野県生まれ。
早稲田大学卒業。
銀座の彩壺堂(東京セントラル美術館)で14年間修行した後に独立。東京・銀座に「画廊宮坂」を開廊して21年。主な著書に「200万歩の旅」「冗句集」があり、月刊「宮坂通信」の編集長。

仕事の関係で「行ったことのない県がない……」というのが私の自慢の一つではあるが、特に広島とは縁があって、過去に数十回は訪ねている筈である。いわば、広島は私の第二のふるさとと言っても過言ではないだろう。

何回行っても広島は私を温かく迎えてくれる。宮島の鹿は餌を買おうとする仕草をした瞬間から私に飛びついて来てくれるし、お好み焼きも好きで、行くたびに、もっとおいしい所と探し回ったが、今や、「一番おいしい……」と思っている所の常連で、ママが笑顔で迎えてくれるのがうれしい。

こんなおいしいお好み焼きを東京でも食べたいと思っていたら、何と昨年暮れにいつも行く広島のお店の東京店がオープンしたではありませんか。早速行ってみると、しかも広島店は息子さんに任せて、ママさんが東京店に専念するとのこと。こんなうれしいことはない。

念じていたら東京と広島が繋がって、広島を思い出すたびに、お好み焼きを食べに行っ

ている私があります。

去年は「ふぐ料理」を食べることになったが、そのうまさにはびっくりした。しかも、肝まで出たのには驚いた。その時にはご馳走になってしまったので、いくら取られるか分からないので、自分であれだけのものを自腹で注文する勇気がまだ私にはない。

何十回も来た割には、七本目の川と言われる『流川』にはまだはまらずに、無事にきているが、これは私が来るときはいつも、家内が一緒ということも関係があるのだろう。

去年はもう一つ、私にとって衝撃的とも思えるあることに出会った。仕事の関係でA医院を訪ねたのであるが、その受付に「私たちに笑顔と、やさしい言葉がなかったら、ご指摘下さい。」という張り紙があるではないか。健康おたくの私は、座右の銘？を二つ持っていて、「健康のためなら死んでもいい」ともう一つは「生きているのが一番健康に良くない」であるが、そんな私がこの張り紙には本当に驚いた。「医は仁術」と言うがまさに、気持ち、笑顔一つで患者さんは、治癒に向かっていくのではないだろうか。

その医院にはたくさんの本が図書館のように置かれていて、貸し出しまでしてくれるという。よく人間は、その人の何か一つを見ればその全貌が分かると言われているが、その理論からすると、こういう立派なお医者さんがいるということは、広島のスべてのお医者さんが、すばらしいということになる。私はこの現実を知って将来は広島に永住をしたくなったものである。